牧草で画く

北海道にも富士山がある。標高は約一、七〇〇米だが、独立した美しいすり鉢型の山である。アイヌ名をマッカリヌプリと言うが、普通には羊蹄山または蝦夷富士とよばれている。札幌から南へ汽車で四時間、函館から北へ六時間、道内の北部山岳地帯の中に突忽としてそびえたつている。その雄大な姿は全く均齊のとれた、安定感のある美しさであるが、その美しさを益々引立てる山々が、その西側の深い後志川の峡谷をへだててそそり立ち、全く申し分のない山岳地帯の美しい雰囲気をつくつている。西の方にある一群の山々はニセコアンヌプリである。火山特有の荒けずりの山頂が波頭のように迫つて来て、登らない人の心でさえもひきつける。

この羊蹄山とニセコアンヌプリの火山灰の山麓の波状地は、観光地としては絶佳であるが、農業的には勿論良いとは言えない。全般に海抜は高く、積雪も多く、したがつて融雪はおくれ、農期間も短い。夏は大陸性気候で、比較的高温になるから、馬鈴薯、豆類等各種の農作物が作られてはいるが、なんと言つても、かかる立地条件では、特に地味の肥沃な地帯はともかく、然らざるところでは、当然有畜経営、いわゆる酪農の型をとらなければならない。

この狩太村に模範的な酪農家として有名な木島与四松さんが住んでいる。秋の一日、自転車を駆つて木島さんを訪ねてみた。

真正面に羊蹄山を眺めながらゆく白い道の両側には、もうススキやハギの花が見られ、すつかり秋の景色である。デントコーンや大豆、ヒエなどを織なす輪作に整理された畠の合間に、ところどころ馬鈴薯を掘る人々の姿が見える。ペタルを踏むこと約十五分で木島さんの門をくぐつた。丁度すり鉢の底にあたる所に、先ず赤い煉瓦建の新しい住宅がわれわれの眼をひく。酪農経営と赤い屋根は完成した一つの絵の要素である。波状地を整然と区切つた圃場の絵具皿から木島さんが画いた一つの芸術品であろう。

母屋はガランとして人気はない。ずつと高い圃場で、四、五人の人が働いているのが見える。木島さん一家のイモ掘りらしい。天気も良いので、あまり仕事の邪魔はしたくないが、と思いながらイモ畑へゆくと、小柄ではあるが、日にやけ、がつしりと大地をふまえたといつた感じのする木島さんが、忙しい中にもかかわらず快くわれわれを迎えてくれた。早速圃場をめぐりながらお話をきく。

先ず目について素晴しいのは、ラデノクロバーの放牧地である。八反の面積はラデノクロバーで見事に覆われて、今放牧したばかりというのであるが、ちよつと見たところではわからないほどよく育つている。八反を三区劃に分ち、一区五日間宛、一日二回ずつ、搾乳牛三頭、若牛四頭を放牧するという。電気牧柵にもたれて説明する木島さんの顔が真剣にラデノクロバーを礼讃する。ラデノクロバーと電気牧柵のおかげで三段とびに楽になつた。労力は省かれ、乳量は増し、しかも飼料作付面積は減少したといわれる。

ラデノクロバーの放牧により、赤クロバーの場合より一日一頭当り二升も搾乳量が違うし、また乳量の変化がない。それだけに放牧時間には特に注意し、一回三十五分〜四十五分を正確に守り、また放牧する前には排糞させるよう習慣づけているという。このおかげで従来一頭当り九反を要した飼料畑が、現在では七・三反で済み、今年は青刈牧草が余つたので弟さんに半分分けているという。なるほどとうなずけるラデノクロバーの生育ぶりであり、また巧みな利用であつた。

木島さんの経営面積は約十町、販売作物は馬鈴薯、燕麦で二・八町、食料作物は家族七人のために、水田、麦、大豆、ヒエ、蔬菜等併せて一町四反、飼料作物としてはラデノクロバーが八反、乾草青刈用としてチモシー、赤クロバー混播牧草地が一町六反、家畜ビート四反、デントコーンがサイレージ用一町三反、青刈用が四反、濃厚飼料用としてヒエ、大豆が四反となつており、これで搾乳牛三、二歳牛二、当歳二、馬二、羊三、豚一頭を飼育しているわけである。これで労力の方もほぼ自給でき、牛乳も一頭当り約五十石は搾つているという。購入飼料等の詳細はきく時間もなかつたが、デントコーン、ラデノクロバー、混播牧草等の生育ぶりや、牛の肥えかたから判断しても、さもありなんとうなずけるものがあつた。

要するに、徹底した酪農経営であり、飼料作物の組合わせその肥培管理に極めて能率的な点がうかがわれるのである。木島さんがここまで来た苦心は相当たものであつたろう、夜も三、四時間しか寝なかつたかのごとく聞いている。そして、その苦心の結果をよくふりかえつて見ると、飼料作物をよく研究し、これにより土地と牛を同時に肥して来た結果に他ならないようである。

木島さんは今後さらにルーサンも入れてみたいと眼をかがやかしながら話された。この飼料作物に対する積極的な研究心がなくては酪農経営の完成はなかなか面倒であることを如実に裏書きしているわけである。

今年は寒かつた。雨も多かつた。農家にとつては有難くない年であつた。こんな年は今年にかぎつたことではない。しかし、こんな年になると酪農家の経営が浮かび上つてくる。だが木島さんはそんな一時的な気持でこの仕事を始めたのでは恐らくなかろう。この立地条件下でいかにすれば安定した生活をたのしみうるか、過去何百年来研究され議論されて来た一つの原則を素直に実行することによつてこれを達成しようと努力し、今や完成の域まで漕ぎつけたのである。

見事な生育を見せている圃場と赤い煉瓦の文化住宅、この美しい画を——農家が理想として夢に画く絵を——木島さんは雄大な羊蹄山をバックに牧草によつて画きあげたのである。

（なかの）